
埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第112集

熊野遺跡 X (第132次)

2010.2

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第112集

くま の い せき
熊 野 遺 跡 X (第132次)

2010.2

深谷市教育委員会

序

埼玉県北部に位置する深谷市は、古代には武蔵国に属し、榛澤郡・幡羅郡・男衾郡の3郡にまたがっていたと考えられています。

平成3年の発掘調査では、榛澤郡役所の一部と想定される倉庫群跡が、中宿遺跡から検出されました。県内初の発見例であることから、「中宿古代倉庫群跡」として県指定史跡となりました。

今回報告する熊野遺跡は、この中宿遺跡の南に隣接しています。これまでの170次におよぶ発掘調査の結果、7間×3間の掘立柱建物跡をはじめとする大規模建物群や竪穴住居跡などとともに、道路状遺構・連房式鍛冶工房・石組井戸など特殊な遺構も検出されました。さらに、役人が使用したと考えられる帯金具や円面硯なども数多く出土しており、熊野遺跡は役所的機能を有していたことが想定されています。

本報告書は、店舗建設に先立ち平成10年に実施した熊野遺跡132次調査の成果をまとめたものです。住居跡2軒が検出され、遺跡の性格を考える上で資料を追加することができました。本書が学術・教育関係はもとより、文化財の保護・保存の啓蒙・普及を図る資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成まで、多大なるご理解とご協力を賜りました関係各位・諸機関に心より御礼申し上げます。

平成21年2月

深谷市教育委員会

教育長 猪野 幸男

例 言

1. 本書は、埼玉県深谷市岡に所在する熊野遺跡の、平成10年に実施した132次発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 文化財保護法第57条の3第1項に基づく事業者あての指示通知は、次の通りである。
平成10年4月3日付 教文第3-813号
3. 文化財保護法第57条第1項に基づく発掘調査の通知は、次の通りである。
平成10年4月3日付 教文第2-219号
4. 発掘調査は、鳥羽政之・竹野谷俊夫が担当し、平成10年3月23日～平成10年3月31日にかけて実施した。
5. 出土品の整理及び実測・観察表の作成は、竹野谷俊夫が行なった。
6. 図版作成は、宮本直樹と竹野谷俊夫が行った。
7. 本書の執筆は、宮本直樹が行なった。
8. 本書に掲載した資料は、深谷市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 発掘調査位置図は岡部町全図（1/10,000）及び岡部町平面図（1/2,500）を、遺跡分布図は国土地理院発行『本庄』（1/25,000）を使用した。
2. 遺構実測図は、現場では基本的に1/20、カマド実測図を1/10とし、本書掲載の段階で1/60及び1/30とした。遺物については、基本的に1/3で掲載した。
3. 図中の方位は、座標北を示す。
4. 遺物観察表の数値に（ ）のあるものは推定値、《 》のあるものは残存値を示す。
5. 土層断面図及びエレベーション図のスクリーントーン（斜線）は、地山を示す。また、図中の数値は、標高値を示す。
6. 遺構実測図中の英数字は、以下を表す。
SJ 竪穴住居跡

I 発掘調査の経緯及び経過

1. 発掘調査の経緯

埼玉県北部に位置する深谷市は、埋蔵文化財の宝庫として古くから知られてきた。なかでも、縄文時代草創期の土器を出土した西谷遺跡や、弥生土器で知られる上敷免遺跡、重要文化財に指定された緑釉手付瓶を出土した西浦北遺跡など、著名な遺跡が多い。

熊野遺跡は、深谷市の北西に位置する。JR高崎線岡部駅のすぐ北西にあたり、県道蛭川普濟寺線と国道17号線に挟まれた範囲である。近年までは駅から少し離れると家も少なく、畑が多く残っていた。しかしながら、『岡中央土地区画整理事業』が平成元年に立ち上がり、事業が進展するに伴い景観が激変しつつある。この区画整理事業に先立つ発掘調査は、平成4年度から始まり、調査件数は急増した。それ以前の熊野遺跡における調査は、岡部西小学校及び岡部西幼稚園建設に伴い4次の調査が実施されていたにすぎなかったが、平成4年度以降は現在までに163次に及び発掘調査が実施されている。

調査の結果、竪穴住居跡700軒、掘立柱建物跡150棟を始めとして、石組井戸・道路状遺構・土橋状遺構を伴う大溝・連房式鍛冶工房など特殊な遺構も多数検出された。遺物では、多量の土器類のほかに、帯金具・円面硯・唐三彩・和同開珎・刻字紡錘車など一般の集落では見られない出土品が目される。

今回報告する発掘調査は、店舗建設に先立ち、平成9年度に実施したものである。

まず、平成10年1月19日に、岡宣幸氏(以下、「事業主」と記す)から、埋蔵文化財の所在についての照会が旧岡部町教育委員会(以下「町教委」と記す)にあった。町教委では、埋蔵文化財包蔵地図により開発予定地が熊野遺跡の範囲内であることを確認し、遺構の存在の有無を確認するための試掘調査が必要である旨を書き添えて、同日に事業主に書面にて回答した。その場において、試掘調査依頼書が事業主から提出されたので、2月15日に試掘調査を実施した。調査は、敷地内において1本のトレンチを設定した。調査の結果、竪穴住居跡2軒を検出した。

これを踏まえ、町教委と事業主で協議を重ねた結果、工事の変更は不可能であり遺跡の破壊は免れないため、記録保存のための発掘調査を岡部町遺跡調査会(当時)が実施することで調整を進めた。事業主もこれを了承し、平成10年3月19日付けで文化財保護法57条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が、町教委を経由して文化庁長官宛に提出された。

これを受けた遺跡調査会では、文化財保護法57条の1に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出を所定の手続きを経て、平成10年3月19日に文化庁長官へ提出した。埼玉県教育委員会教育長からの埋蔵文化財発掘届に対する事業主宛の指示通知は、平成10年4月3日付け教文第3-813号においてなされた。

実際の発掘調査は、平成10年3月23日に開始し、同年3月31日まで実施した。

2. 発掘調査・整理報告の経過

(1) 発掘調査の地番及び遺跡番号

熊野遺跡の埼玉県遺跡登録番号は、No.63-017である。

調査地点の地番は、深谷市岡字熊野2,909番地2、2,909番地3である。岡中央土地区画整理事業では、30街区2、3画地となる。

熊野遺跡では、先述のとおり過去に多数の調査が実施されてきた。深谷市が行なったものと(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施したものを合わせると、現在170地点に及ぶ。

今回報告分は、平成4年度以降実施した調査のうち132次調査と命名したものである。

(2) 表土除去

発掘調査は、3月23日から着手した。作業は、まずバックホーによる表土除去から始めた。

表土から30～50cm掘り下げると黄褐色ローム面が表れたので、これを遺構確認面とした。

狭小な調査面積のため、表土除去は1時間程度で終了した。

(3) 遺構確認・基準点測量

表土除去終了後、調査補助員による遺構確認作業を実施した。その結果、竪穴住居跡2軒を確認した。

(4) 遺構掘り下げ及び図化作業

遺構の掘り下げは、調査区中央の1号住居跡から始めた。まず、断面観察のためのベルトを設定し、これを残しながら掘り下げを進めた。また、遺物は極力原位置を保つように注意を払った。

基準点測量は3月25日に隣地境界杭を基に仮の測量点を設置した。その後、住居床面を検出した段階で、埋没状況を調べるための断面観察を実施し、1/20の縮尺で図化した。

その後ベルトをはずし、遺物の出土状況の写真撮影を行い、1/20の縮尺で図化した。

遺物を取り上げた後、床面の精査を行い、柱穴・壁溝などを検出し、掘り下げを実施した。さらに、カマドの調査が終了したところで、完掘状況の写真撮影を実施し、別の遺構へ移動した。

他の溝跡やピットなども同様に調査を進めた。全ての遺構の掘り下げが終了した時点で、調査区全体の写真撮影を実施し、その後に全測図を作成した。

調査の全工程が終了し、機材・プレハブ等の撤収が完了したのは、平成10年3月31日のことであった。

(5) 整理・報告

発掘調査で検出された遺物の水洗・接合は、深谷市教育委員会が平成21年5月より開始した。これと並行して、図面の整理作業を行なった。遺物の実測は、平成21年7月から行い、併せて図版の作成を行なった。8月以降原稿を執筆し、たつみ印刷株式会社に入稿したのは21年9月のことであった。

報告書の印刷が完了したのは、9月31日のことである。

3. 発掘調査・整理・報告書 刊行の組織

(1) 発掘調査（平成9年度）岡部町遺跡調査会

会 長	大野 福治
事務局 長	今井 宏
事務局次長	米沢 信男
事 務 局	大谷 住雄
”	中野 弘
”	鳥羽 政之
”	平田 重之
”	宮本 直樹
臨時職員	竹野谷俊夫
”	松田 哲

発掘調査参加者

今成ハル子	大野 ハツ	大野カネ子
岡 和夫	小暮 辰治	小暮 雄一
斎藤 好江	渋沢 ヤイ	

(2) 整理・報告書刊行（平成21年度）

教 育 長	猪野 幸男
教 育 次 長	石田 文雄
次 長	島崎 保
課 長	澤出 晃越
課 長 補 佐	須藤 忠昭
”	吉羽 厚仁
係 長	村松 篤
主 査	宮本 直樹
主 任	荻野 直美
”	知久 裕昭
主 事	幾島 審
主 事 補	飯島 峻輔
臨時職員	竹野谷俊夫
”	伊藤万里子
”	北本ゆかり
”	佐藤 由江
”	布施みゆき
”	松井紀代子



第1図 熊野遺跡の範囲と調査地点



第2図 熊野遺跡132次調査地点位置図

II 遺跡の地理・歴史的環境

1. 地理的環境

深谷市は、埼玉県の北部に位置し、市内をJR高崎線、関越自動車道などが通る。

熊野遺跡は、深谷市岡字熊野他に所在する。JR高崎線岡部駅の北西に位置し、東西1,300m、南北1,000mの範囲に及ぶ。近年は市街化が進んでいる。

遺跡は、櫛引台地の北部に立地する。南部には標高116mの山崎山とこれに連なる諏訪山が存在する。遺跡の中心から600m北は崖線となり、比高差20mをもって妻沼低地へ移行する。また、櫛引台地の西は藤治川により区分され、本庄台地と接している。

2. 歴史的環境

熊野遺跡の立地する櫛引台地北部は、早くから開発が進み、これらに伴う発掘調査の結果、縄文時代～中世に至る様々な遺構・遺物が検出されている。

縄文時代では、西谷遺跡から押圧縄文・爪形文土器などが検出され、草創期の土器として注目されてきた。遺構では、四十坂遺跡で前期の竪穴住居跡が、水窪遺跡や菅原遺跡から中期の住居跡が、上宿遺跡で後期の敷石住居跡が検出されている。

弥生時代では、四十坂遺跡より縄文晩期～弥生初期の土器群が出土し、弥生初期のまとまった資料として早くから注目されてきた。その後、平成2年の発掘調査では、再葬墓や土坑墓群が検出された。

古墳時代に至ると、遺跡数は急増し、重要な遺構も多数確認されている。

四十坂遺跡からは、五領～和泉期に至る方形周溝墓群が検出され、この段階から後期群集墳まで連続と墳墓が営まれていたことが知られる。中でも四十塚古墳は、横矧板鋌留短甲・五鈴鏡板付轡などを出土し、これらの遺物から5世紀後半の当地域の首長墓と捉えられている。

その後、6世紀代には、やはり首長墓と想定される寅稻荷塚古墳（前方後円墳）が四十塚古墳群内に出現する。これ以降、首長墓は、お手長山古墳（帆立貝式古墳）・内出八幡塚古墳（円墳）・愛宕山古墳（方墳）

と順次南東方向へ移動しながら単独で築造されたことが認められる。

この他に、熊野遺跡の東に接する白山古墳群では、6世紀代の古墳跡24基（円墳23、帆立貝式古墳1）が調査された。弾琴埴輪や壺を捧げ持つ巫女の埴輪など6体の人物埴輪が、ほぼ完全な形で出土した。

なお、櫛引台地北部における古墳時代の集落は、現在のところ中宿遺跡や上宿遺跡など数か所が確認されているに過ぎない。この時代の集落は、妻沼低地に立地する砂田前遺跡・岡部条里遺跡や本庄台地上の六反田遺跡・大寄遺跡・宮西遺跡などがあり、櫛引台地以外に分布の中心が認められる。

奈良～平安時代になると、様相は一変する。それまで墓域として利用されてきた熊野遺跡内に、突如集落が営まれる。これまでに163次に及ぶ調査が実施され、700軒を超える竪穴住居跡、150棟の掘立柱建物跡をはじめ、道路状遺構・大溝・石組井戸・連房式鍛冶工房など特殊な遺構が多数検出された。また、円面硯・帯金具・唐三彩の陶枕・緑釉段皿、刻字紡錘車・陶製仏殿・置きカマドなど他の集落では見られない貴重な遺物も多数出土している。

なお、集落の開始時期は、131次調査1・2号竪穴住居跡から出土した畿内産土師器の年代観から、7世紀第3四半期と考えられている。さらに、1次調査において検出された7間×3間をはじめとする大型建物の存在から、該期の熊野遺跡は初期評家と想定されている。

また、櫛引台地縁辺部に位置する中宿遺跡からは、大規模な総柱式建物跡20棟が規則的に配置された状態で検出された。榛沢郡家に伴う正倉跡と推定され、7世紀後半の成立であることから熊野遺跡との関連が想定される。これと前後して台地直下には「滝下大溝」が掘削された。その北側には条里遺構が検出されたことから、灌漑と運河の機能を併せ持っていたことが考えられる。

さらに、熊野遺跡の北東に位置する岡遺跡では、8世紀第2四半期と考えられる蓮華文軒丸瓦などが多量に出土する範囲があり、廃寺跡と推測されてきた。平成13年度に町教委が実施した確認調査により、版築



- | | | | |
|-------------|----------------------|--------------|---------------|
| 1. 熊野遺跡 | (律令期集落・官衙・中世居館) | 18. 東光寺裏遺跡 | (縄文・平安集落) |
| 2. 中宿遺跡 | (郡衙正倉・律令期集落) | 19. 榛沢六郎成清館跡 | (中世) |
| 3. 滝下遺跡 | (河川跡・律令期集落) | 20. 石蔭遺跡 | (古墳～平安集落・周溝墓) |
| 4. 岡麿寺 | (寺院跡・古墳～律令期集落) | 21. 地神祇遺跡 | (古墳～平安集落) |
| 5. 岡部条里遺跡 | (古墳集落・条里水田・律令期居宅) | 22. 千光寺遺跡 | (古墳群・平安集落) |
| 6. 砂田前・樋詰遺跡 | (古墳～平安集落) | 23. 西谷遺跡 | (縄文) |
| 7. 白山遺跡 | (古墳群・律令期集落・中世居館) | 24. 茶白山遺跡 | (古墳群) |
| 8. 新田遺跡 | (律令期集落) | 25. 伝上杉館跡 | (中世) |
| 9. 上宿遺跡 | (縄文・古墳～律令期集落) | 26. 山河聖天社 | (中世) |
| 10. 四十坂遺跡 | (縄文集落・弥生再葬墓・周溝墓・古墳群) | 27. 西龍ヶ谷遺跡 | (律令期集落・中世居館) |
| 11. 原ヶ谷戸遺跡 | (縄文・古墳集落・古墳群) | 28. 伝岡部六弥太館跡 | (中世) |
| 12. 水窪遺跡 | (縄文・古墳集落・周溝墓・古墳群) | A. 四十坂浅間山古墳 | (円墳) |
| 13. 新井遺跡 | (律令期集落) | B. 寅稻荷塚古墳 | (前方後円墳) |
| 14. 東五十子遺跡 | (古墳・中世集落) | C. お手長山古墳 | (帆立貝式古墳) |
| 15. 六反田遺跡 | (古墳・中世集落) | D. 前原愛宕山古墳 | (方墳) |
| 16. 大寄遺跡 | (縄文・弥生～律令期集落) | E. 内出八幡塚古墳 | (円墳) |
| 17. 西浦北遺跡 | (縄文・古墳～律令期集落) | F. 四十塚古墳群 | (古墳群) |

第3図 周辺の遺跡分布

された基壇状遺構が検出された。近接する住居跡から「榛」の刻字瓦や「寺」と墨書された土師器坏も出土し、寺院跡であることが立証された。

このように、奈良～平安時代の櫛引台地北部は、中宿遺跡・熊野遺跡を中心として、その周辺に集落や寺院が展開していた状況が窺われる。

Ⅲ 発見された遺構と遺物

1. 熊野遺跡の概要

熊野遺跡は、櫛引台地北端部に展開する集落跡である。遺跡の標高は55m前後であり、南西から北東に向かって緩やかな傾斜を有している。遺跡から北東へ約600mで台地縁辺部に達し、眼下には利根川及び小山川により開析された妻沼低地が開けている。沖積地との比高差は、約20m程である。遺跡は、南北約1,000m、東西約1,300mを測り、当地域最大の規模を誇る。

熊野遺跡は、主として奈良・平安時代～中世にかけて営まれた複合遺跡である。それ以前の櫛引台地北部は、古墳群が造営される墓域であった。熊野遺跡内にも、終末期の帆立貝式古墳であるお手長山古墳と、これに続くと考えられる内出八幡塚古墳（円墳）が築造された。その後7世紀中葉から後半にかけて、遺跡が形成されたことが、これまでの発掘調査により明らかとなっている。

発掘調査は、まず岡部西小学校建設に先立ち、昭和52年～54年に実施されたのが始まりである。3次にわたる調査の結果、奈良～平安時代を中心とした竪穴住居跡83軒、掘立柱建物跡2棟が検出された。遺物では、円面硯や帯金具などの出土が目される。

また、平成4年度から始まった岡中央土地区画整理事業に伴う発掘調査は、現在までに163次にわたり実施されている。調査の結果、竪穴住居跡720軒、掘立柱建物跡160棟あまりが検出された。このほか、7間×3間の大型建物や、大規模な石組井戸跡、連房式鍛冶工房、大溝等が特筆される。出土遺物では、多量の土器類のほかに、帯金具・円面硯・唐三彩・和同開珎・刻字紡錘車なども特筆される。さらに、鎌・鋤先などの農耕具や刀子などの鉄製品も多いが、鉄鏃や小札な

古代から中世にかけては、まず岡部六弥太館跡があげられる。方形に廻る堀跡や井戸、土壇墓などが検出された。同様な堀跡は、熊野遺跡と白山遺跡からも検出され、館跡に付属するものと推定されている。西龍ヶ谷遺跡では、軸を揃えて並んだ6棟の掘立柱建物群が確認された。

どの武器・武具の出土も注目される。

更に、これらと並行して実施された岡埼玉県埋蔵文化財調査事業団の4次の調査により、竪穴住居跡201軒、掘立柱建物跡110軒、道路状遺構、井戸跡4基などが検出されている。遺物では、陶棺や置きカマドなども出土している。

遺跡が形成されたのは、131次調査1号・2号住居跡から出土した畿内産土師器の年代観から、7世紀第3四半期と推定される。その後、10世紀代まで集落が営まれていたことが判明している。

中世では、1辺が約95mの方形区画溝が検出されており、館跡が想定される。また、現在までに2箇所の墓域が確認されており、多数の土壇墓から銭貨やカワラケが出土している。地下式坑も検出されており、深さ5mの規模を有するものもある。さらに、遺跡の中ほどに「岡の五輪塔」が建ち、市の指定文化財となっている。

2. 発見された遺構と遺物

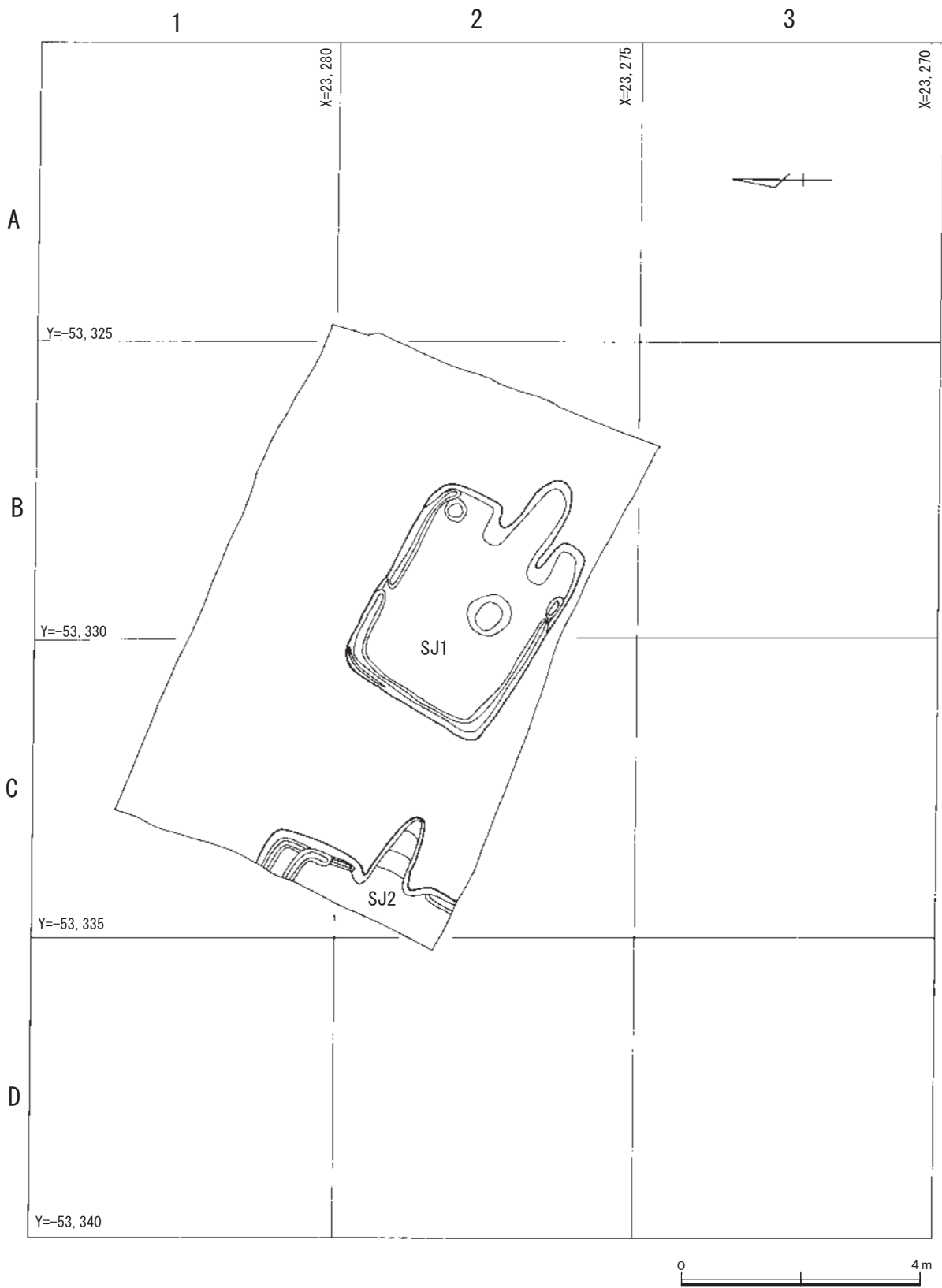
今回報告する発掘調査地点は、深谷市岡字熊野2,909番地2,2,909番地3（岡中央土地区画整理事業30街区2,3画地）である。平成4年度以降に実施された熊野遺跡における発掘調査では、132次調査にあたる。調査により検出された遺構は、奈良時代の竪穴住居跡2軒である。

以下、順を追って詳述する。

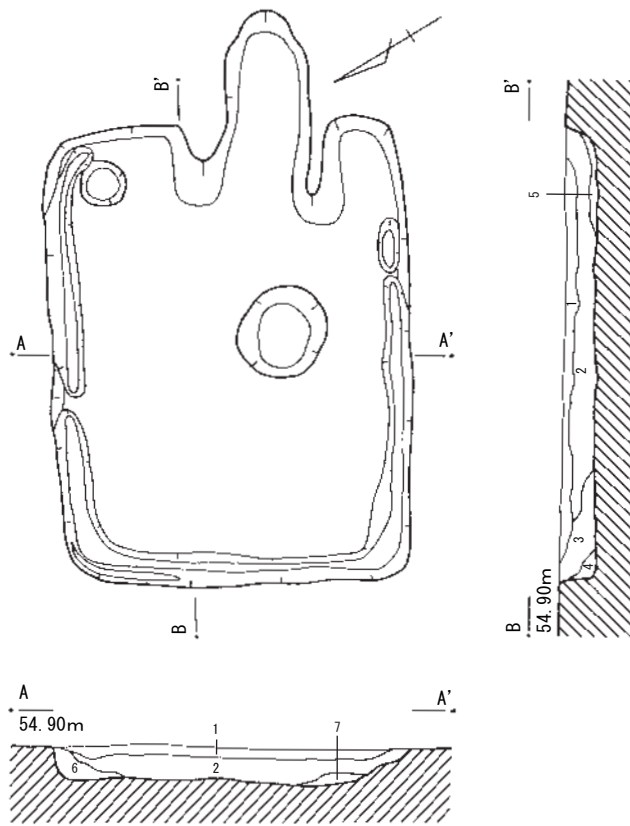
1号竪穴住居跡

調査区中央の南部に位置する。

規模は、長軸3.69m短軸は2.90mを測り、平面形態



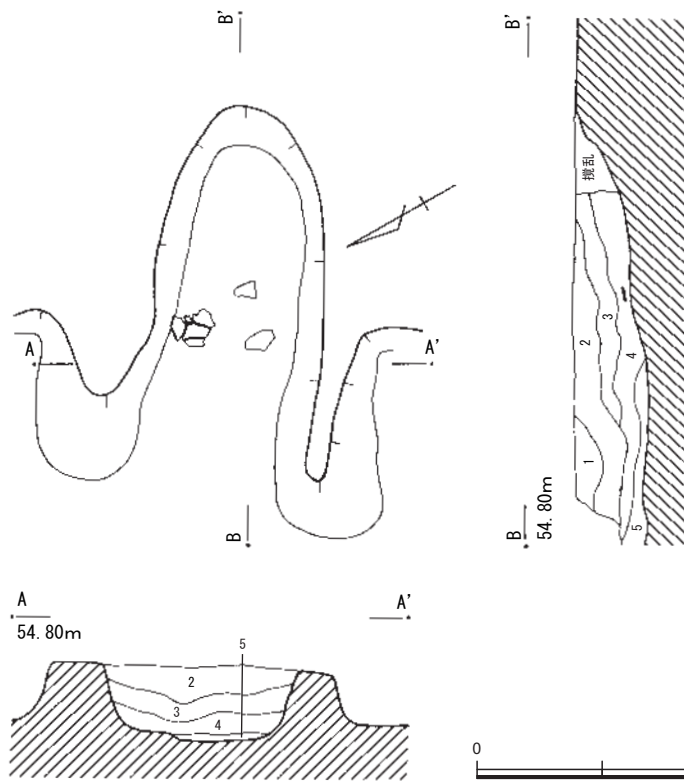
第 4 図 熊野遺跡132次調査全測図



1号住居跡土層説明

- 1 褐色土 ローム粒・白色粒多量。ロームブロック (1 cm) 少量。
- 2 暗褐色土 ローム粒・白色粒多量。ロームブロック (2~3 cm) 少量。粘性あり。灰褐色粘土ロックあり。
- 3 暗茶褐色土 ローム粒・白色粒多量。ロームブロック (0.5cm) 微量。
- 4 暗黄褐色土 ローム粒・白色粒・ロームブロック (2~3 cm) 多量。粘性あり。
- 5 暗黄褐色土 ローム粒・白色粒・ロームブロック (2~3 cm) 多量。
- 6 暗茶褐色土 ローム粒・白色粒多量。ロームブロック (2~3 cm) 少量。
- 7 暗黄褐色土 ローム粒・白色粒多量含む。

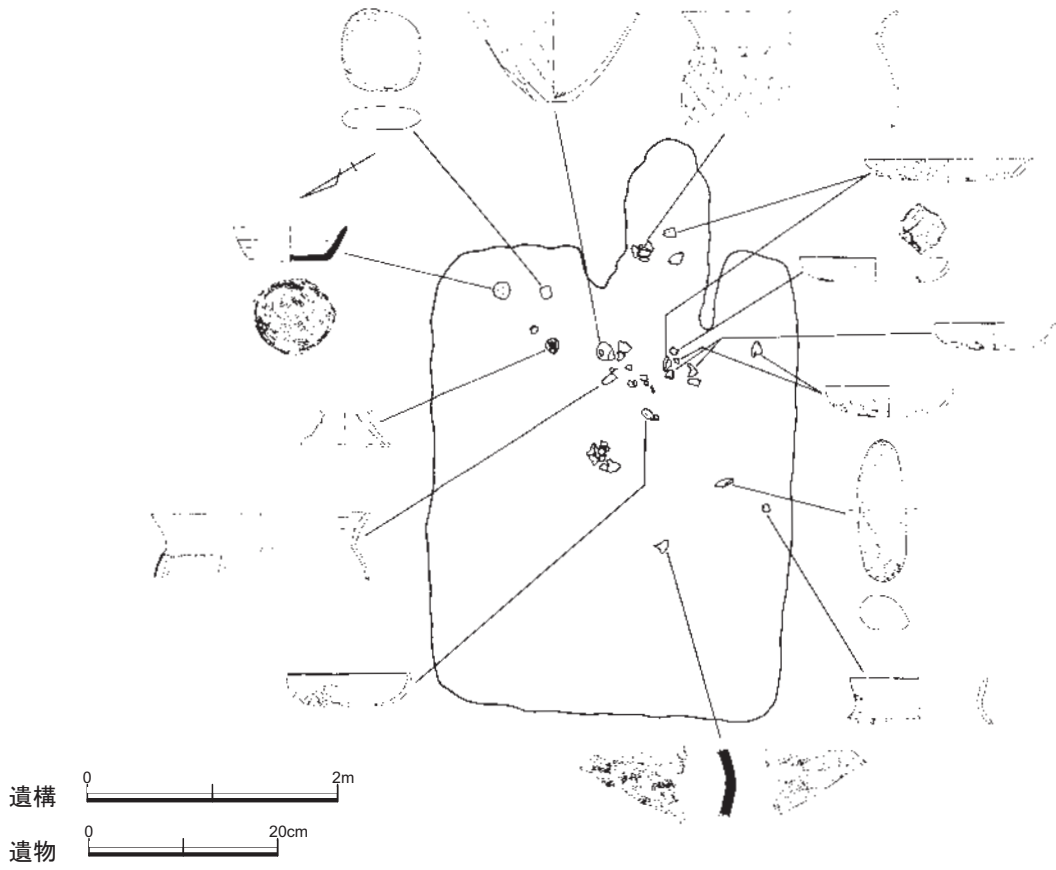
第5図 1号住居跡実測図



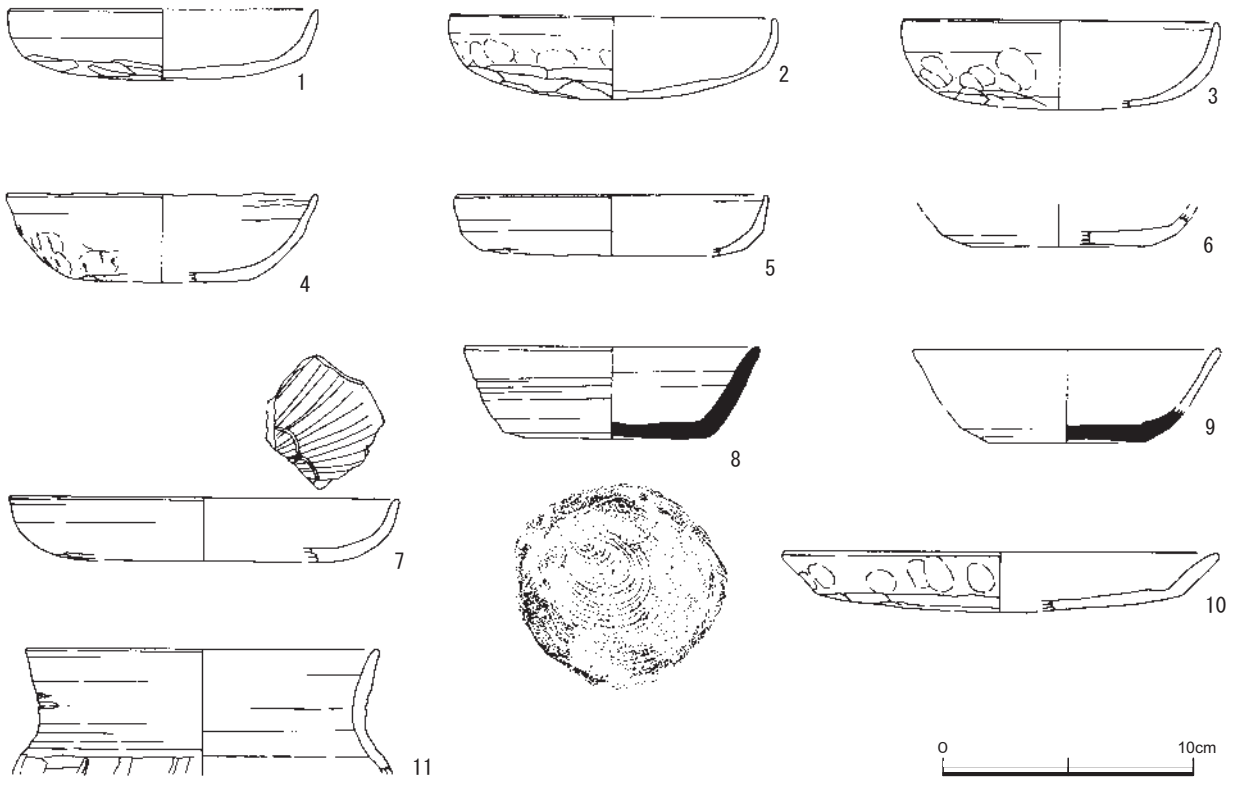
1号住居跡カマド土層説明

- 1 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。
- 2 黒褐色土 ローム粒・焼土ブロック・焼土粒多量。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒・炭化物粒多量。
- 4 黒褐色土 ローム粒・焼土ブロック多量。
- 5 黒褐色土 ローム粒・焼土粒多量。やや軟質。

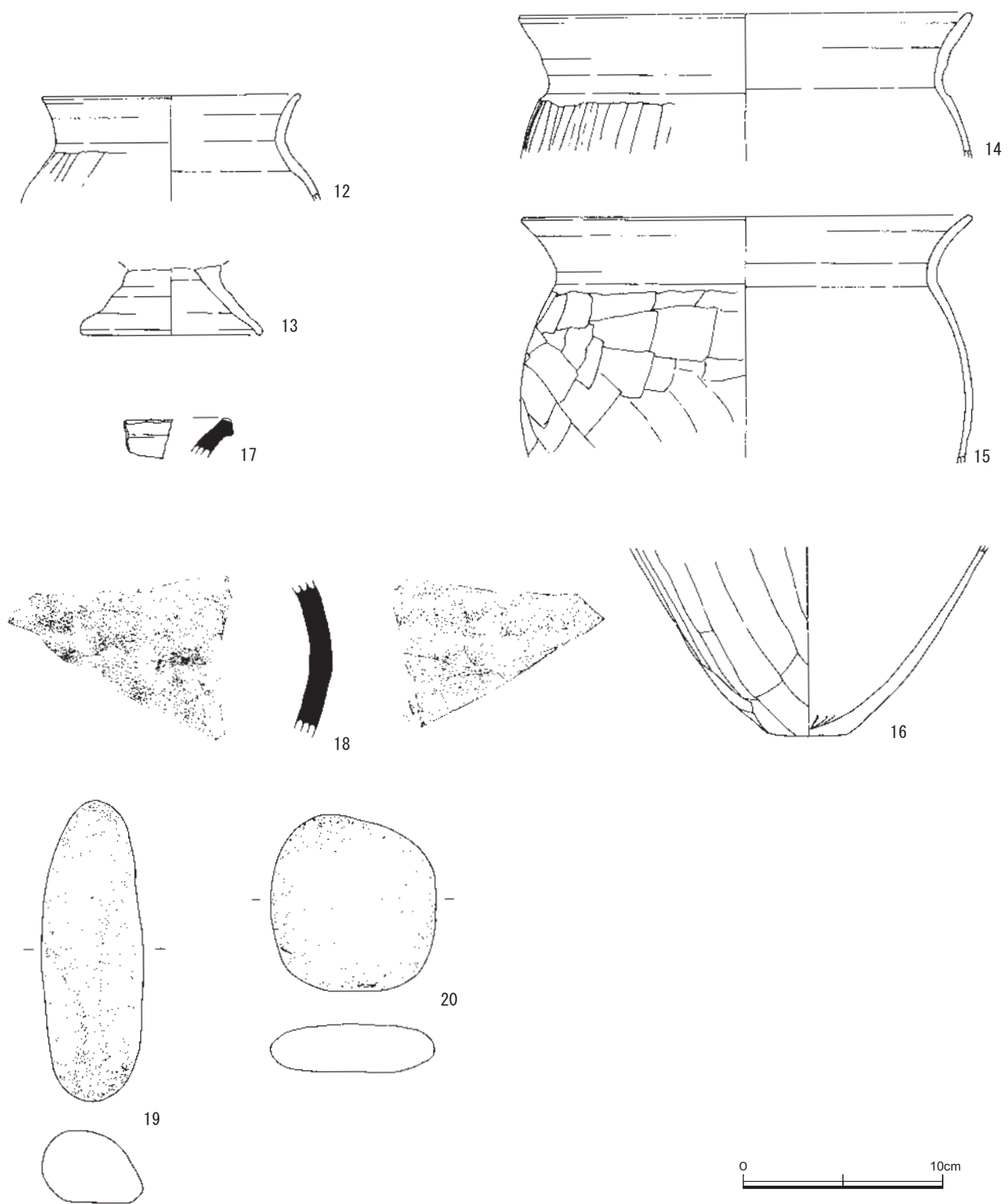
第6図 1号住居跡カマド実測図



第7图 1号住居跡出土遺物分布状況図



第8图 1号住居跡出土遺物実測図(1)



第9图 1号住居跡出土遺物実測図(2)

第1号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	坏	12.0	2.8		灰橙褐色	普通	石英、雲母(精良)	90%	内外面油脂状黒斑
2	坏	12.7	3.3		灰赤褐色	普通	雲母、角閃石(精良)	85%	油脂状黒斑少量
3	坏	(12.3)	(3.5)		にぶい橙褐色	普通	雲母、角閃石(精良)	図示 40%	内外面油脂状黒斑少量
4	坏	(12.0)	(3.5)		暗橙褐色	普通	石英、角閃石(精良)	図示 30%	覆土一括、歪みあり
5	坏	(12.2)	(2.4)		灰茶褐色	普通	石英、雲母	図示 15%	カマド一括
6	坏		《1.4》	(7.1)	橙褐色	普通	石英、角閃石、白色粒(精良)	図示 20%	覆土一括
7	坏	(15.2)	(2.5)	(12.0)	赤褐色	良好	石英、チャート、赤色粒	図示 10%	内面放射状暗文+螺旋暗文
8	須恵坏	11.4	3.6	8.3	明灰色	普通	石英、長石、片岩、チャート	99%	周辺回転篋ケズリ+面取り 末野産
9	須恵坏		《1.4》	(6.1)	灰色	良好	長石、片岩、細礫	図示 15%	全面回転篋ケズリ、末野産
10	皿	(17.0)	(2.4)	(14.4)	明橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示 45%	
11	台付甕	(13.8)	《5.0》		にぶい褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示 40%	
12	台付甕	(12.3)	《5.3》		暗褐色	良好	石英、角閃石、微砂粒	図示 15%	覆土
13	台付甕		《3.5》	(8.7)	灰橙褐色	普通	石英、角閃石、雲母	図示 95%	
14	甕	(21.9)	《7.2》		明褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示 15%	
15	甕	(21.7)	《12.0》		暗赤褐色	普通	石英、チャート、バミス、砂粒	図示 20%	
16	甕		《9.5》	3.8	暗褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示 60%	
17	須恵甕				明灰色	普通	石英、長石	破片	覆土一括、末野産
18	須恵甕				暗灰色	良好	石英、長石、黒色粒	胴部破片	末野産
19	編物石	長さ14.8	幅5.0	厚さ3.6	重さ363g		石質・砂岩	100%	
20	磨石	長さ8.7	幅8.1	厚さ2.4	重さ263g		石質・砂岩	100%	

は長方形を呈する。主軸方位は、N-60°-Wを示す。

壁はやや角度をもって掘り込まれ、床面は若干の凹凸をもつ。確認面からの深さは、28cm前後を測る。

ピットは、北東コーナーで1基が検出された。平面形態は円形で、直径37cm、床面からの深さは11.5cmを測る。また、土坑が床面中央で検出された。平面形態は不整形円で、直径74cm、床面からの深さは6cmである。

壁溝はカマドを除き全周した。幅は20～28cm、床面からの深さは2～6cmを測る。

カマドは、東壁を削り出し構築されていた。袖は粘土の造り付けで、右袖82cm、左袖68cmを測る。燃烧部は、長さ170cm、最大幅76cmを測る。底面は平坦で、煙道に向かい緩やかに立ち上がる。

出土遺物は、カマド内及びその周辺に集中していた。土師器の坏・皿・甕・台付甕、須恵器の坏・甕、磨石などが出土した。時期は8世紀第1四半期と考えられる。

2号竪穴住居跡

調査区の西端に位置する。

大半が調査区域外にあるため、規模等は不明である。南北辺で3.3m以上を図る。平面形態は、方形を呈すると推測される。主軸方位は、N-60°-Wを示す。

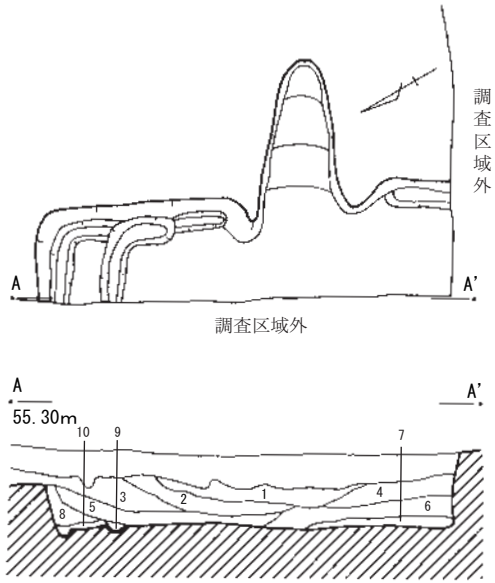
壁は角度をもち掘り込まれ、床面は若干の凹凸をもつ。確認面からの深さは、35cm前後を測る。

ピットは、確認した範囲では検出されなかった。

壁溝は、幅20～28cm、床面からの深さ2～4cmを測る。

カマドは、東壁を削り出し構築されていた。袖は粘土の造り付けで、右袖30cm、左袖19cmを測る。燃烧部は、長さ118cm、最大幅56cmを測る。底面は平坦で、煙道に向かい緩やかに立ち上がる。

出土遺物は、カマド内及びその周辺に集中していた。土師器の坏・甕・小型甕・台付甕、須恵器の坏・高台碗・甕、磨痕石などが出土した。時期は8世紀第1四半期と考えられる。

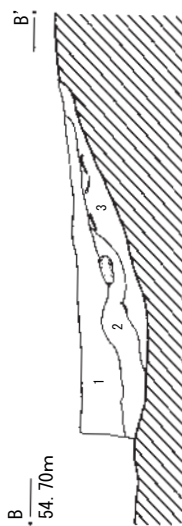
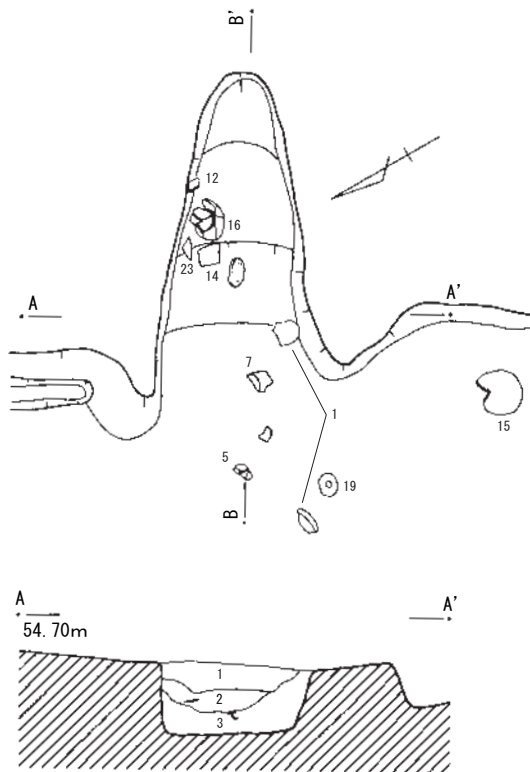


2号住居跡土層説明

- 1 暗黄褐色土 ローム粒・白色粒・ロームブロック (2~3cm) 多量。粘性あり、しまりなし。
- 2 暗茶褐色土 ローム粒・白色粒多量。焼土粒少量。しまりなし、粘性なし。
- 3 暗茶褐色土 ローム粒・白色粒・ロームブロック (1cm) 少量。しまりなし、粘性なし。
- 4 暗黄褐色土 ローム粒・白色粒少量。しまりなし。粘性なし。
- 5 暗褐色土 ローム粒・白色粒多量。ロームブロック (2~5cm) 少量。しまりなし、粘性なし。
- 6 暗茶褐色土 ローム粒・白色粒・ロームブロック (1~3cm) 少量。しまりなし、粘性なし。
- 7 暗褐色土 ローム粒・白色粒少量。しまりなし。粘性なし。
- 8 黒褐色土 黒色土主体。ロームブロック (2~3cm)・焼土粒少量。しまりなし、粘性なし。
- 9 黄褐色土 ハードローム主体。しまりあり、粘性なし。
- 10 暗黄褐色土 ソフトローム主体。しまりなし、粘性なし。



第10図 2号住居跡実測図

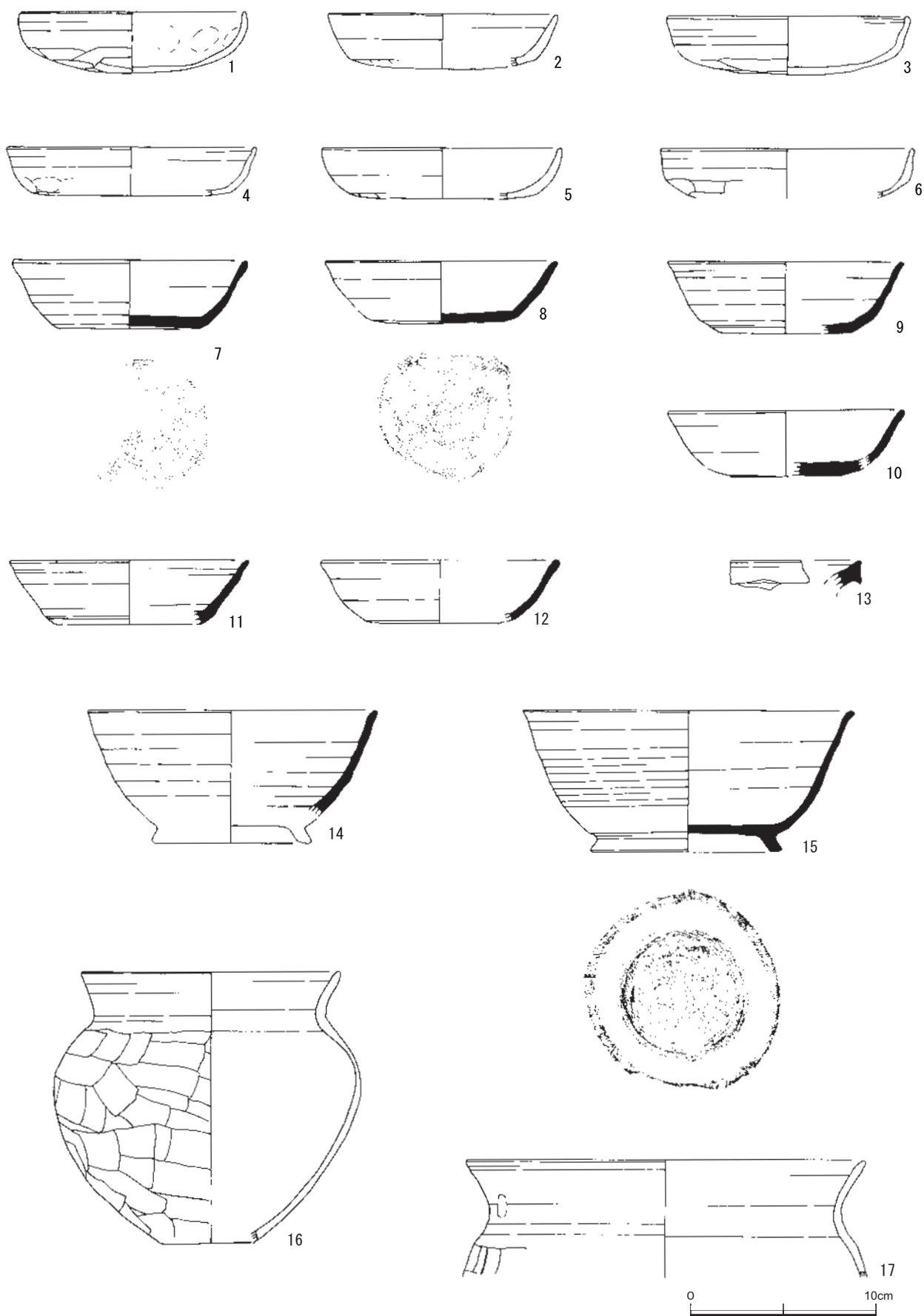


2号住居跡カマド土層説明

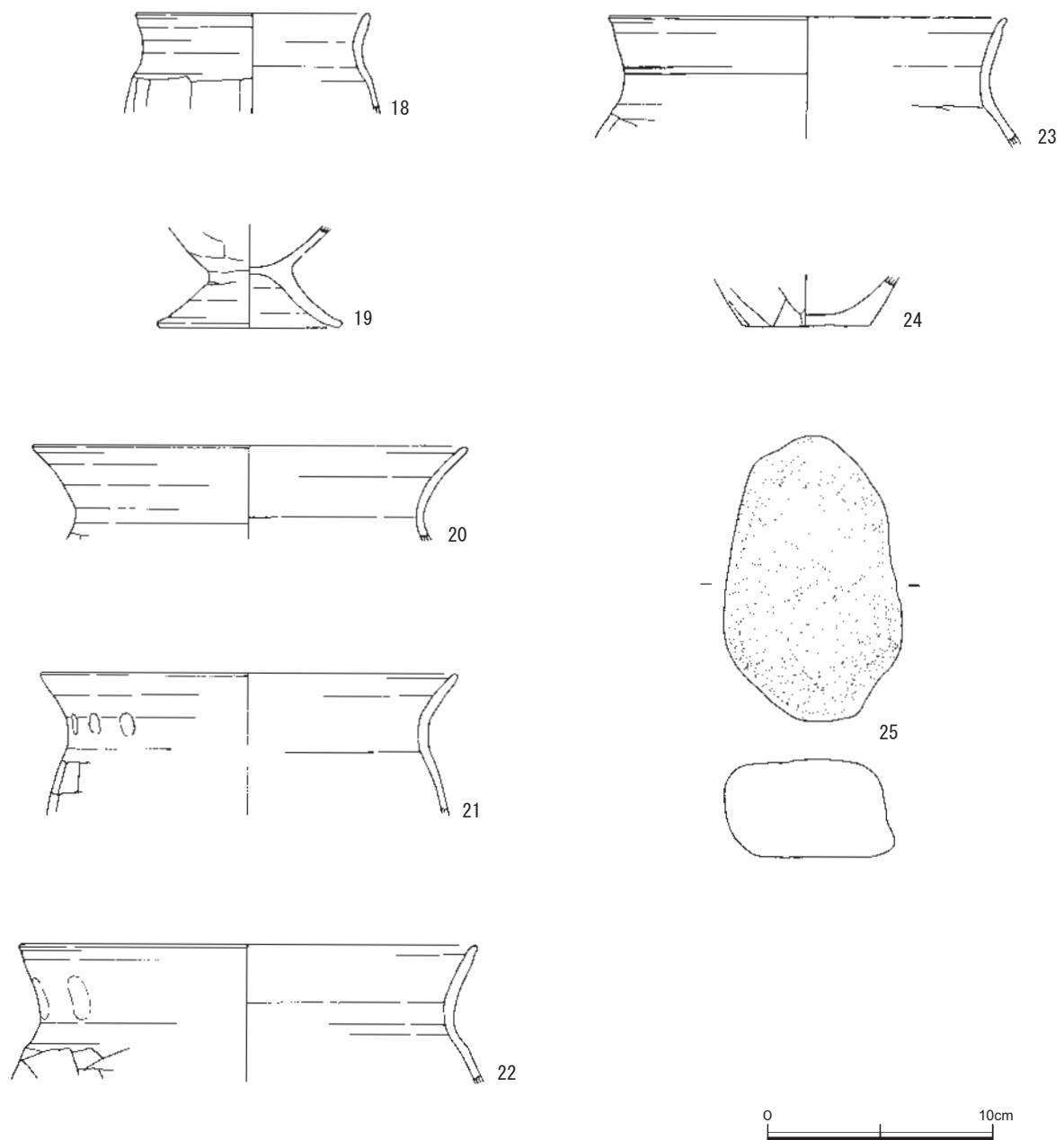
- 1 暗茶褐色土 ローム粒・粘土ブロック多量。焼土粒少量。
- 2 暗茶褐色土 ローム粒・白色粒多量。焼土ブロック少量。
- 3 黒褐色土 ローム粒・白色粒多量。ロームブロック少量。



第11図 2号住居跡カマド実測図



第12图 2号住居跡出土遺物実測図(1)



第13图 2号住居跡出土遺物実測図(2)

第2号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	坏	11.8	3.3		灰赤褐色	普通	雲母、角閃石	80%	内外面に油脂状黒色物付着
2	坏	(12.0)	(2.9)		にぶい赤褐色	普通	石英、雲母	図示 20%	内面油脂状黒色物微量
3	坏	(12.5)	3.1		灰赤褐色	普通	石英、角閃石	50%	内面油脂状黒色物少量
4	坏	(13.0)	(2.6)		灰橙褐色	普通	石英、角閃石、雲母	図示 15%	内外面に油脂状黒色物少量
5	坏	(12.4)	(2.7)		橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示 20%	
6	坏	(13.2)	《2.7》		灰褐色	普通	雲母、微砂粒	図示 13%	覆土
7	須恵坏	(12.1)	3.6	(7.3)	淡灰色	普通	石英、チャート、片岩、黒色粒	35%	周辺回転篋ケズリ、未野産
8	須恵坏	(20.0)	3.3	6.8	明灰色	普通	石英、黒色粒	45%	覆土、周辺手持ち篋ケズリ、未野産
9	須恵坏	(12.1)	3.8	(6.8)	黄褐～灰黒色	不良	石英、長石	図示 20%	回転篋ケズリ+面取り、産地不明
10	須恵坏	(12.3)	(3.5)	(5.8)	淡灰褐色	不良	石英、長石、片岩、微砂粒	図示 25%	全面回転篋ケズリ、未野産、磨減あり
11	須恵坏	(12.4)	(3.4)	(7.8)	淡灰色	普通	石英、長石、チャート、片岩	図示 10%	覆土、回転篋ケズリ+面取り、未野産
12	須恵坏	(12.4)	(3.4)	(7.8)	淡灰褐色	不良	石英、長石、片岩	図示 15%	回転篋ケズリ、未野産、磨減あり
13	須恵鉢				明灰色	普通	石英、長石	口縁部破片	覆土、未野産
14	須恵高台埴	(15.0)	《5.7》		にぶい黄灰色	不良	石英、長石、片岩	図示 20%	未野産、磨減あり
15	須恵高台埴	17.2	7.6	9.8	にぶい黄褐色	やや悪	石英、長石、微砂粒	90%	未野産
16	小型甕	13.5	(14.5)	(4.8)	橙褐色	普通	石英、チャート、角閃石、砂粒	80%	
17	甕	(20.8)	《6.3》		橙褐色	普通	石英、チャート、微砂粒	図示 10%	
18	台付甕	(10.0)	《4.5》		灰赤褐色	普通	石英、角閃石、バミス、砂粒	図示 55%	カマド一括
19	台付甕		《5.1》	7.8	赤褐色	普通	石英、角閃石、雲母、砂粒	図示 70%	
20	甕	(18.6)	《4.2》		赤褐色	普通	石英、チャート、微砂粒	図示 15%	カマド一括
21	甕	(17.8)	《6.3》		橙褐色	普通	石英、チャート、角閃石、微砂粒	図示 10%	覆土
22	甕	(19.6)	《6.1》		赤褐色	普通	石英、チャート、角閃石、微砂粒	図示 10%	
23	甕	(17.0)	《5.8》		灰橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示 10%	
24	甕		《2.3》	(5.4)	灰橙褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示 35%	
25	磨痕石	長さ12.6	幅 7.7	厚さ 4.4	重さ 675g		石質・砂岩		

IV 発掘調査のまとめ

今回の調査では、2軒の竪穴住居跡が検出された。狭小な調査範囲であり、1号住居跡は完掘できたが、2号住居跡はカマド周辺のわずかな調査にとどまった。遺物は、2軒ともに土師器・須恵器の土器類が大半を占め、特筆すべきものは出土しなかった。

しかしながら、近接して検出された両者は、主軸を揃え、しかもほぼ直線上にのっている。時期は1号住居跡が8世紀第3四半期で、2号住居跡が8世紀第4四半期と考えられるため、1号住居跡から2号住居跡への同一敷地内での立て替えが想定される。

周辺に目を転じると、まず東方には初期評家と想定される7間×3間の床束をもつ掘立柱建物を筆頭とする大型建物群が存在する。周辺の竪穴建物からは、畿

内産土師器や刻字紡錘車が出土している。一方、西方では7世紀後半から8世紀前半にかけて機能していたと考えられる石組井戸が検出された。その北側には多量の土器が投棄された特殊遺構が存在する。また、南側の竪穴建物からは、銅鈴が出土しており、石組井戸の周囲で郡司層により祭祀が行われた可能性が指摘される。

しかしながら、本調査地点周辺は遺構の密度が低い地帯であり、掘立柱建物跡は今のところ検出されていない。さらに北側一帯は、遺構が全く確認されていないことから、何らかの儀式が行われた広場的な空間が存在したと推測される。その近くを道路状遺構が南北に貫通していたと想定される。



第14図 熊野遺跡132次調査周辺遺構図

写真図版



1号住居跡



1号住居跡カマド



1号住居跡遺物出土状況(1)



1号住居跡遺物出土状況(2)



1号住居跡No. 1



1号住居跡No. 2



1号住居跡No. 3



1号住居跡No. 4



1号住居跡No. 8



1号住居跡No.10



1号住居跡No.11



1号住居跡No.13

图版 2



1号住居跡No.15



1号住居跡No.16



1号住居跡No.19、20



2号住居跡No.1



2号住居跡No.3



2号住居跡No.7



2号住居跡No.8



2号住居跡No.15



2号住居跡No.18



2号住居跡No.16



2号住居跡No.19



2号住居跡No.25

報告書抄録

ふりがな	くまのいせき								
書名	熊野遺跡X								
副書名									
シリーズ	深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書								
巻次	第112集								
編著者名	宮本直樹・竹野谷俊夫								
編集機関	深谷市教育委員会								
所在地	〒366-0823 深谷市本住町17番地3 TEL048(572)9581								
発行日	平成22年2月26日								
しょうゆいせき 所収遺跡	しょうざいち 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡						
くまのいせき 熊野遺跡 (132次調査)	さいたまけんふかやしおか 埼玉県深谷市岡 あざくまの 字熊野2, 909-2、-3		11405	17	36° 12' 30"	139° 14' 25"	平成10年3月23日から 平成10年3月31日まで	442m ²	店舗建設
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
	集落跡 官衙跡 居館跡	奈良～ 平安時代	竪穴住居跡		土師器 須恵器 石製品				

熊野遺跡X

2010年2月26日

編集発行 ●深谷市教育委員会
埼玉県深谷市本住町17番地3

